

アンケート調査から見る子育て支援センターへの新たな提案

長 崎 イ ク・馬飼野陽美*・岡村由紀子*

I 目的

近年、「子どもが育てにくく、また育ちにくい地域環境になってきており、子育て中の親は、孤立しがちになり、育児支援の役割が大きくなっている」(金田 2011)¹といわれている。子どもを持てば、だれでも自然に母性愛にあふれた母親になるわけではなく、母性は子育ての中で子育てを通して獲得される。時代が変われば子育てへの意識も異なる。60代のかって子育てをした女性は「子育ては楽しい」「有意義で素晴らしい」と思う割合が高いが、30代のまさに子育て世代は「やりたいことができなくてあせる」「いきがいではない」と思う割合が高く、子育て中に強くストレスを感じ、「育児ノイローゼに共感できる」とする割合も高かった(大日向 1988)²。これらの変化は、平均年齢の上昇による子育て後の人生の長さ、家族、近隣社会との付き合いの希薄化、住環境の変化などの様々な要因がある。むろん、親になり、子どもを育てることによって「小さなことにこだわらない柔軟さと度胸・タフさ、自分の欲求や立場を抑制し、他と強調する態度、広い多角的な視野、運命や信仰などの重視や謙虚さ、生きがいと存在感、自分の考えや立場の明確さや強さなど」が変化したと親自身(母親に限らず父親も)思っている(柏木 2003)³ように子育てを通して親自身も成長するが、親としての自信と満足感を得るためには親だけに子育てをお任せする状況にはない。

母親が子育てで孤立しないようにと様々な施策がとられているが、その一つが子育て支援センターである。主に3歳以下で保育園に行っていない子どもの一時預かりや子ども連れの母親同士の交流の場が設けられている。乳幼児のいる母親が家庭にこもって孤立しないようにと、子育て中の母親が気軽に集まり、子ども同士、母親同士の交流と職員のサポートで、育児の不安を減らし、子育てを楽しめるようにと援助をしている。子育てセンターは地域でいろいろな試みをしており、母親はどのように思っているのか、どのような在り方を望んでいるのか、直接職員が話を聞いたり、アンケート調査をしたりしている。一昨年には社会福祉法人日本保育協会が全国調査を行った結果を公表している⁴。地域の特性も大きいので、それぞれの地域で、利用者の声を聴き、より良い支援のあり方を探ることが必要である。

また、最近インターネットの普及で、人と人との直接のやり取りよりも、ネットを通じた交流を求めるといわれる。子育てにおいても、インターネットの質問サイトやブログ、会員同士の交流サイトで自分の子育てを公開し、情報を交換し合うこともある。携帯電話のアプリであかちゃんをあやすものもでき、日々、アプリの数も内容も豊かになっている。子育て支援センターの職員が「いないいないばあってどうするんですか」「赤ちゃんをあやすってどうすればいいんですか」と質問されてしまう昨今、昔、子育てをした世代は、人と人とのかわりではなく、機械にあやされて育つとしたら、子どもはどうなっていくのかと不安を感じている。そこで、子育ての相談、情報収集に関して最近の母親はどのような方法をとるのかを調べた。

*本学非常勤講師

この調査によって、子育て支援センターを利用する母親たちは子育て支援センターをどのように感じ、どのような要望を持っているのか、また、母親たちが子育てについての相談、情報収集をどのように行っているのかを調査し、子育て支援センターの新しいあり方を検討したい。

II 方法

S市内16か所の子育て支援センターにアンケート用紙を配置し、センターの職員から母親にやわらかく協力をお願いをしてその場で記入、回収した。

実施期間 2012年 1月 (配置した期間はおおむね2週間)

III 結果

回答者数 445名

1. 住環境

アパート・マンションが多く、ついで一戸建てであり、社宅は少ない(図1)。アパート・マンションで5階以上の高層階は22軒(4%)と少なかった。

2. 家族の形態と相談できる親族

拡大家族は17%、核家族ではあるが近所に相談できる親族がいる人は46%おり、合計すると63%となり、全体の2/3の人たちは、相談相手が近くにいることがわかった。

核家族で、相談できる親族が近くにいない人は37%であった(図2)

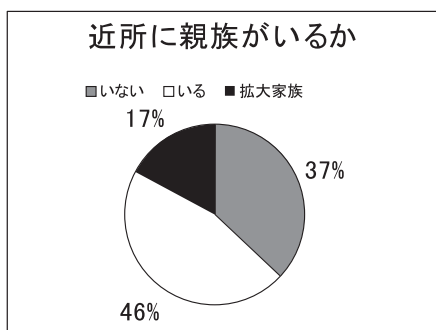


図2

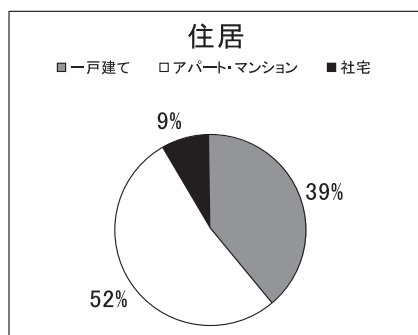


図1

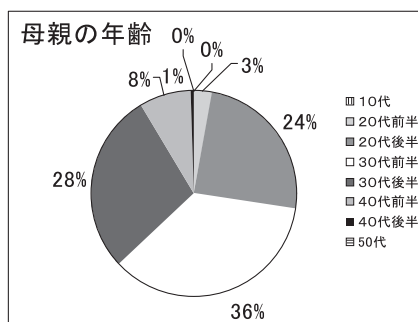


図3

3. 母親の年齢

母親の年齢は30代前半、後半それぞれ36%、28%で30代が7割を占め、20代後半が24%であった。10代、50代は、回答者の中にはいなかった(図3)。

4. センターの利用状況

① 利用回数

利用回数は、週1回程度の人が多く、ついで、週2，3回、月数回が続いた。

回答者の約3/4が毎週通ってきている。

中には、週5回という人も4名いた（図4）。

② 利用時間と利用の場所

1回の利用時間は2～3時間が多く、1時間以内を含めると90%となり、3時間以上いる利用者は少ない（図5）。

なお、多くの利用者は一カ所のセンターを利用している。

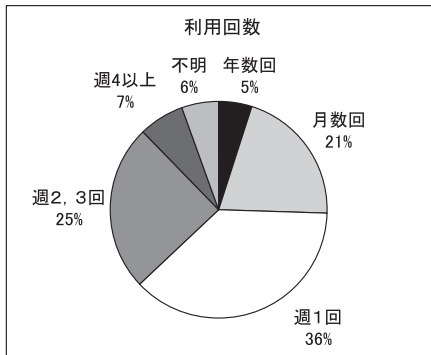


図4

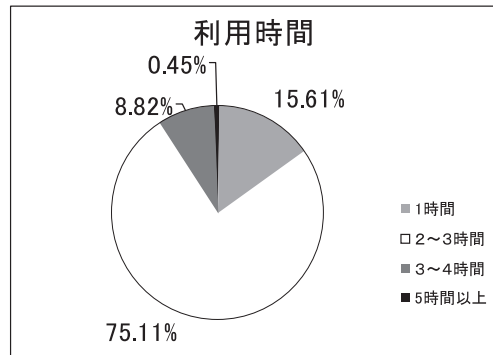


図5

③ 利用のきっかけ

利用のきっかけは「友だちに誘われて」が多く、半数近くが選択している。ついで、「広報」が多かった。イベントに興味を持ったという人もおり、その他でさまざまなきっかけで来た人がおり、「近所だから」、「姉妹からきいて」や「保育園のチラシなどで知って」「保健センターで知って」があった（図6）。

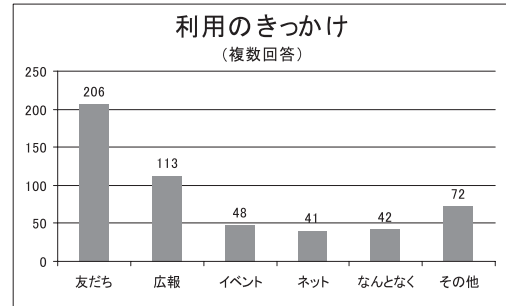


図6

④ 利用してよかったこと

図7に利用してよかったこととして、項目ごと選択した人数を示した。

複数回答しているが、「子どもがたのしそう」が最も多く、大半（90%）が選択している。「おもちゃや絵本がたくさんあるから」「過ごしやすい環境」も多くが選択しており、子どもが楽しく過ごせることが評価されている。

また、「他のお母さんと話せた」「自分にともだちができた」「リフレッシュできた」といった、お母さん自身が快く過ごせる点もよいとされている。

「センターの職員と話せた」「職員に相談できた」という支援センターならではの具体的な支援の形も評価されている。講座やイベントについては選択した人が少なかったが、具体的にはクリスマス会や誕生会がよかったことの内容としてあげられている。

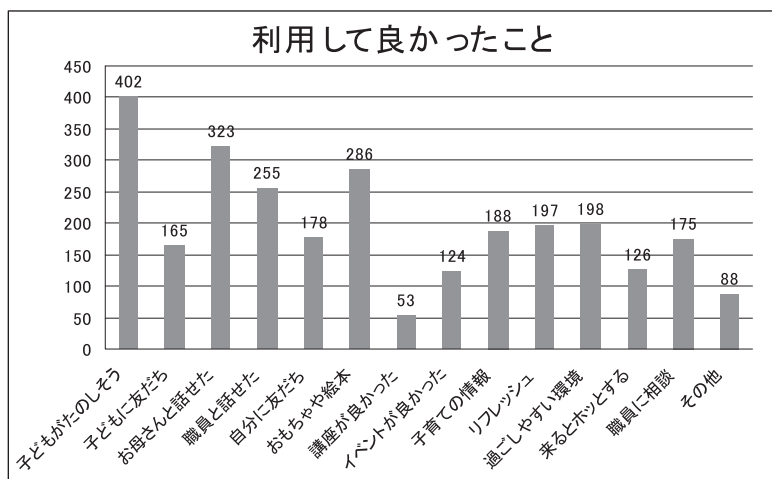


図 7

⑤ 利用回数と利用してよかったことの関係

利用してよかったこととして選択している割合を、利用回数ごとと調べたところ、回答者の大半が選択したり、逆にほとんど選択していない項目では回数ごとの差はないが、選択者が半数くらいの項目の中で、利用回数との間に関係のみられる項目があった。

「子どもに友だちができた」「来るとほっとする」「センターの職員に相談にのってもらえた」は、利用回数が多いほど利用してよかったと答える割合が高かった。これらはしばしば来て、他の子ども、お母さん、職員と顔なじみにならなければできないことであり、しばしば来ることによってセンターの良さがわかることを示していると思われる。(図 8～10)

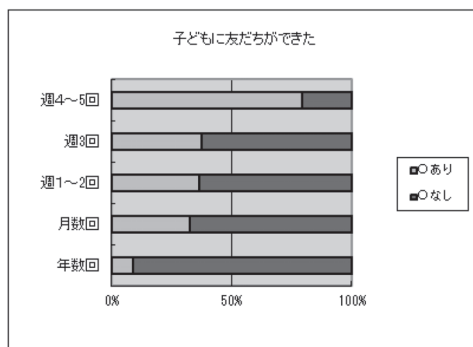


図 8

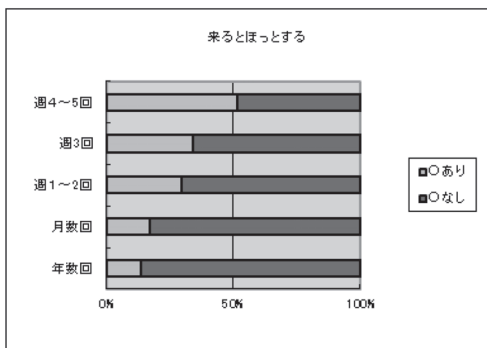


図 9

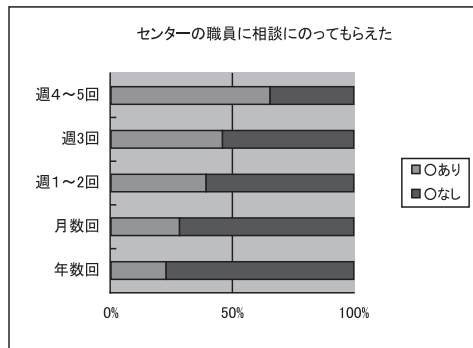


図10

⑥ 母の年代別にみた 利用してよかったこと

項目を年代別に選択された割合が多い順に並べると、上位4つまでは同じであり、年代によって差がないことが分かった。

20代		30代前		30代後		40代以上	
楽しそう	87	楽しそう	87	楽しそう	95	楽しそう	94
母と話	71	母と話	69	母と話	75	母と話	78
おもちゃ	63	おもちゃ	61	おもちゃ	67	おもちゃ	68
職と話	51	職と話	55	職と話	64	職と話	55
過ごし	47	リフレッシュ	41	過ごし	50	情報	50
リフレッシュ	45	母に友	40	リフレッシュ	44	リフレッシュ	50
情報	42	相談	40	情報	43	過ごし	44
母に友	41	情報	39	相談	40	母に友	39
子に友	40	過ごし	37	子に友	38	相談	39
相談	37	子に友	35	母に友	38	イベント	34
イベント	21	ほっと	30	イベント	36	子に友	31
ほっと	18	イベント	24	ほっと	34	ほっと	31
その他	17	その他	19	その他	20	その他	26
講座	6	講座	10	講座	18	講座	13

5. 育児の相談方法と手段についての意識

① 育児の相談相手

相談相手では、「よく相談する」4点～「相談しない」1点として得点化し、その平均得点を図11に示した。

夫、親、友人という「人」が得点が高く、相談相手として選ばれている。インターネットやSNS等での相談は比較的少ない。その他としては姉妹、いとこなどが上げられていた。

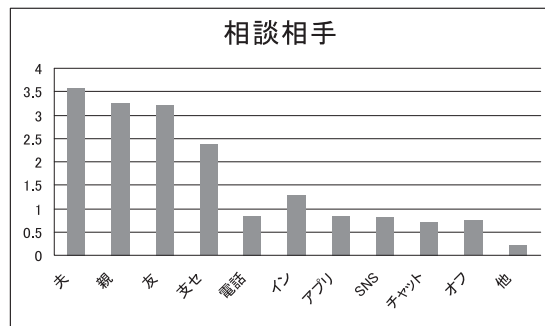


図11

② 相談方法

相談方法としては「よくある」「時々ある」を含めると97%が「会う」ことを選んでいる。「電話」「メール」は何れも「よくある」は20%と少なく、「時々ある」を含めても60%で、相談する場合には40%の人はこの方法を選んでいない。

③ 情報源

子育ての情報源を「よく使う」4点、「ときどきつかう」3点、「あまり使わない」2点、「使わない」1点として

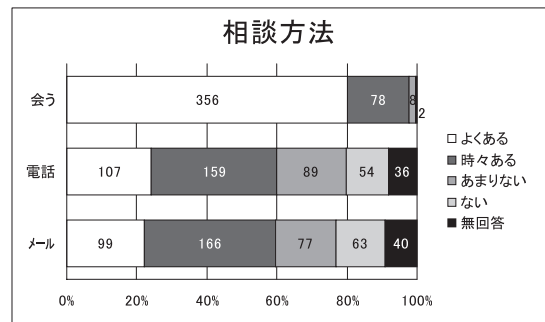


図12

得点化し、図に示した。夫、親よりも友人、子育て支援センターが活用されており、そのほか、雑誌・書籍、テレビ・新聞、インターネットもよく活用されている。

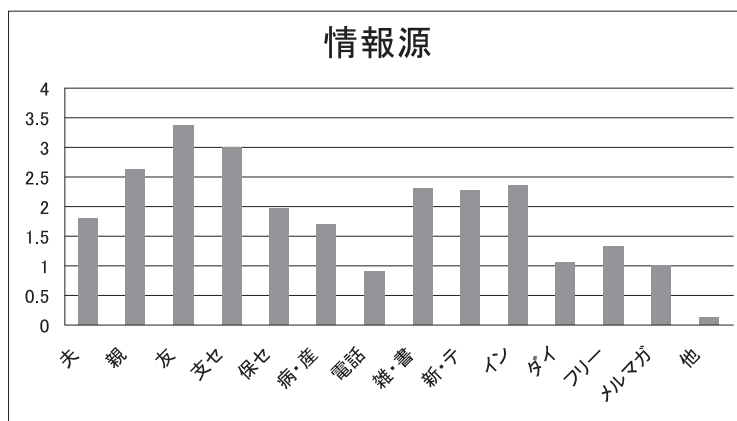


図13

④ 相談相手と情報源の比較

①の相談相手と③の情報源を比較すると、図14に示すように相談相手と情報源には差がある。夫は相談相手ではあるが、情報源とはなっていないこと、インターネットに相談することは少ないが、情報源としては活用される。友人は相談相手としても、情報源としても頼れる相手である。

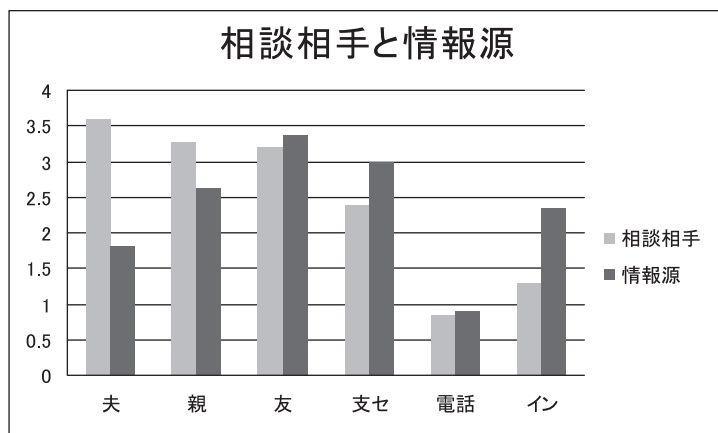


図14

6. 子育て支援センターへの要望の自由記述から

自由記述でセンターへの要望を記入してもらった。調査をおこなったセンターは公設、民設さまざま、立地条件、開設時間も施設によって異なっているので、全体に関連する要望もあれば、すでにその要望は満たされている場合もある。大まかに分けて以下に示した。なお、文章表現を変更したことがある。

1 環境について

- ・食事できる環境、外で遊べるような場所がほしい。もう少し広かったらよい。
- ・駐車場がもう少し広いと少し遠方の友達も気軽に誘えるので良い。
- ・自動販売機を置いてほしい。
- ・冬場は寒いのでもう少し暖かくしてもらいたい。
- ・おむつは持ち帰りで構わないが、ごみを捨てられるとよい。

2 時間について

- ・週に何回かでかまわないので午後も開いてほしい。午後の利用時間を延ばしてほしい。
- ・開放日や時間を増やしてほしい。(注－S市のセンターは月曜日から金曜日開所、時間は午前中だけか、9時から13時ないし15時が多い。)

3 センターの対応について

- ・安全に遊べる場所やスタッフの先生方が声かけをしてくれるので気持ちよく遊べるができる。
- ・目の前の育児の疑問や何か気になること、悩みがあったとき一人だと悶々としてしまうけれども信頼できる相談相手(センターの先生達)がいてくれるので行き詰まらずに過ごせていると思う。
- ・職員の方が子どもへも親へも自然で優しい声かけをしてくださるので今後もこのような場がずっと続いていくといいなと思う。
- ・一番初めの時は親子で緊張した。きっと初めてのママは入りにくいかもしれない。
- ・最初、敷居が高かったが行ってみると非常に満足。
- ・口調などがきついスタッフの方がいらっしゃる場所がある。
- ・地域によっては子どもを複数連れて行ってもサポートしてもらえない。親一人で何人もの子どもをみるのは現実的に無理なので、どこのセンターでも職員の方にサポートについていただきたい。

4 イベントについて

- ・年が近い子どもが集まるイベントをやってもらいたい。
- ・おゆずり会などのイベントがいつも楽しみ
- ・幼児向けのコンサートが世の中に少ないので積極的に開催してほしい。

5 広報について

- ・インターネットで各支援センターの予定表をみたい。

6 他の利用者について

- ・4, 5人で待ち合わせのお母さん達が子どもをほったらかしなのはちょっと困る。
- ・3, 4歳の子どもが滑り台からかけおりたり、走り回ったりして危険だと思ったけれどもその子の親は気にしなく困ったことがある。
- ・いつも一人で子どもを連れて行っているが、ママ友同士ばかりだと少し居場所がないように感じる。

IV 考察

- ① 子育てセンターに来る母親は0歳から3歳の子どもを連れてきているが、30代が多かった。結婚年齢が上がっており、第1子出産が20代後半から30代となっている現実が表れ

ている。

- ② S市は地方都市であり、まだ高層住宅も少なく、一戸建ても多く、3世代同居も多く、別居していたとしても、近くに相談する親族もいる場合が多いが、相談する親族のいない約3分の1の核家族に対して配慮する必要がある。
- ③ 子育て支援センターには毎週同じセンターに通う人が多く、生活に密着している様子がうかがわれる。友だちに誘われて来た人が多いことから、**人と人とのつながりが基礎**であることがわかる。逆に、友人が少ない人こそ、子育て支援センターに来てほしいことを思うと、一人でも来てみようと思うような広報と入りやすさも必要と思われる。
- ④ 利用してよかったことは「子どもが楽しそう」であり、「おもちゃや絵本がたくさんある」ことで、子どもを第一に考えていることがわかる。また、他のお母さんや職員との話もでき、ほっとしてリフレッシュの場になっていることもうかがえた。
- ⑤ 利用回数と利用してよかったことの関係では来る回数が多いほど、子どもに友だちができ、自分にも友だちができたという感じがすることが多いとわかり、「来るから良いと思える」のか「良いと思うからくる」のかはともかく、しばしば来てもらうこと、気軽に来られる雰囲気を作り出すことが重要であると思われる。
- ⑥ 多くの利用者は毎週同じセンターに通い、生活の一部になっている。職員と利用者（母親）の関係だけでなく子ども同士、お母さん同士のかかわりにも気を配って、**利用者同士をつなげることも**、大事な役割となるだろう。自由記述にあるように、知らないお母さん同士はいろいろ思うことがあっても、直接言うのは差し障りがあると言いたくても言わない状況があるようなので、職員の橋渡しがたいせつである。
- ⑦ 講座やイベントが目当てではないというのも重要な視点を与えてくれる。場所や機会の提供ではなく、**フロアで気軽に話ができる相手**としてスタッフが存在することにも意味がある。
- ⑧ 駐車場の拡充の希望があるが、この点については、車でなくても**散歩ついでに来られるような近さ**に母親たちの居場所があると良いのではなかろうか。
- ⑨ 子育てに対する相談、情報収集については夫や親、友人、子育て支援センターに相談する、聞くという割合が高く、インターネットを通しての相談は少なく、人とのつながりが大切にされていることがわかった。また、インターネットでは相談は少ないけれども、情報収集としては使われており使い分けがされていることもわかった。
- ⑩ 近年、インターネットが人と人との直接のつながり以上に普及しており、人と直接話すより、ネットに相談するといわれるが、今回の結果は人とのつながりが重視されていたが、これは友だちを誘って子育て支援センターに集うような母親であるからなのか、それともこれが一般的なのか検討を要する。また、今回は聞かなかったが 最近子育てにも携帯電話のアプリに赤ちゃんをあやすサイトがあり、良く使われているといわれていることについては今後検討したい。

V まとめと提案

今回の結果からは、子育て支援センターとしての役割が見えてきたと思われる。子育て情報の提供、一時保育・児童クラブの充実、医療費や手当の充実など、“子育て支援”の種類にもさまざまなあるが、やはり、子育てには“人と人とのつながり”が重要なのである。周り

に温かい眼差しや励まし応援が在って、生まれた命を人間として育てる親力（親の子育てする力）が育っていくのである。サービスを提供するだけでなく、親を育てていくという視点も必要と考えている。

そのためにも、子育て支援センターには“繋がりをつくる”ということが大きな役割であると考えられる。施設の充実した大きな支援センターではなく、子育て中の親が、雨の日でも、小さい子がヨチヨチ歩いても行ける様な近い場所（町内に1つ位）で気軽に立ち寄れる、小さなたまり場のような居場所がたくさんあることの方が重要なのではなからうか。

しかし、厳しい経済状況の中で新規に場所を作ることは、難しい課題と思われる。

そこで、既存の公民館、老人施設などを利用し、退職した保育者に力を貸り、後は地域の人が集まってきて、「お茶の間」のようなところで子ども達を育ていったらどうだろうか。「町内の子は町内で可愛がろう」と思えば、子どもを真ん中に色々な人が集まり、世代間交流も生まれ地域の絆も生まれる。

子どもは、未来を生きる存在で、その姿は、何と言っても大人を幸せにする。

子どもを街づくりの中心におき「人間関係の豊かな静岡」にもつながるのではないだろうか。

追記 アンケート調査にご協力くださったお母さま方と子育て支援センターの職員の皆様に厚く感謝いたします。

引用文献

- 1 金田利子『育児支援に求められる専門性』「育児の中での臨床発達支援」p32 ミネルヴァ書房 2011 2
- 2 大日向雅美「母性の研究」川島書店 1988
- 3 柏木恵子「家族心理学－社会変動・発達・ジェンダーの視点」東京大学出版会 2003 P193
- 4 社会福祉法人日本保育協会「みんなでつながる子育て支援―地域における子育て支援に関する調査研究報告書―」社会福祉法人日本保育協会 2010

（執筆分担／Ⅰ・Ⅱ長崎、Ⅲ馬飼野・長崎、Ⅳ長崎・馬飼野・岡村、Ⅴ馬飼野）